2021 年度

海外帰国生　入学試験

国　語

注 意

１．試験開始の合図があるまで，この冊子の中を見てはいけません。
２．放送の指示にしたがって，解答用紙の指定された場所に受験番号シールをはり，受験番号・氏名を記入します。
３．試験時間は 45 分です。
４．問題は，１ページから 14 ページまで印刷してあります。試験が始まったら最初に確認（かくにん）し，足りないページがあったら申し出てください。
５．答えはすべて解答用紙に記入してください。
６．試験が終わった後，問題冊子・解答用紙とも回収します。
７．記述問題では，指定された字数の８割以上は書いてください。ぬき出し問題では，指定された字数で答えてください。どちらの場合も，句読点やかぎかっこなどの記号も字数にふくまれます。

共立女子中学校

1

次の1～8の――線をつけたカタカナを漢字で、漢字の読みをひらがなで書きなさい。

1 人の第一インショウはあいさつで決まる。

2 カンの戻(もど)りで桜が長く咲(さ)いている。

3 姉のイジワルな態度に腹を立てる。

4 シュウセキ回路（ＩＣ）の輸入が増える。

5 わが家の父はボウクンである。

6 ドローンを操作する。

7 人を裁くことは責任が重い。

8 車窓から見える景色を味わう。

2 次の各組の複合語は、どのような組み合わせでできていますか。ふさわしいものを後のア～カからそれぞれ一つずつ選び、記号で書きなさい。

1 夏休み・味見・犬小屋

2 パソコンソフト・スキージャンプ・ランニングマシーン

3 アルコール消毒・学習ガイダンス・リモート会議

4 家族旅行・生活様式・女子高校

5 紙コップ・ボール遊び・ガラス戸

ア 和語と和語　イ 漢語と漢語　ウ 外来語と外来語

エ 和語と漢語　オ 和語と外来語　カ 漢語と外来語

3

次の詩を読み、下の問いに答えなさい。

夜の回想

（注1）加納（かのう） 由将（よしまさ）

①なぜ夜が好きなのか
自分で考える
音のない家の中
誰（だれ）の気配もない
ただ
眠（ねむ）っている母の呼吸を
聞きながら
座（すわ）っている時間が
たまらなく好きで
汗（あせ）かきだった幼いころは
風呂（ふろ）から上がるとすぐに
何もできない体で
なにかすれば必ず汗をかいて
［　②　］手つきで
着替（きが）えさせられ
寝かされた

1 ――線①「なぜ夜が好きなのか」とありますが、筆者はなぜ夜が好きなのだと考えられますか。その説明としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア 家の中に誰もいないという一人だけの雰囲気（ふんいき）を楽しめるから
イ 母が眠っているので、自分が自由になったように感じられるから
ウ 静けさの中、一人で思いをめぐらせることができる時間だから
エ 過去を思い出しながら、現在の自分の成長を感じられる時間だから
オ だんだん明るくなっていく夜空を見ながら想像の世界を旅するのが格別だから

2 ［　②　］にあてはまることばとしてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア 荒（あら）い
イ かわいらしい
ウ きめ細かい
エ 涼（すず）しい
オ もどかしい

3 ――線③「苦労したのを思い出す」とありますが、ここでの筆者の気持ちとしてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア 幼い自分への母の対応に疑問を抱（いだ）いている。
イ 受験期に感じたつらさを懐（なつ）かしく思っている。
ウ 自分の夜更（よふ）かしできなかった体質を苦々しく感じている。
エ 受けた愛情を思い出して母をいとおしく思っている。
オ もっと勉強していればよかったと後悔（こうかい）している。

そのためかどうか
すっかり
入浴後は何もできなくなっていた
そのおかげで受験勉強は遅くても十一時まで
しかできないで
③苦労したのを思い出す

少しずつ体も変わり
今はもう何時になっても構わず
寝る時間もまちまち
このまま白んでくる窓を見ていてもいいかな
本当はこの窓ガラスを抜け出して波の音を聞
きながら朝日を見たいところだが
一人で行けるわけもなく
ゆっくりもがき
④行ける日を引き寄せる

（『記憶のしずく』思潮社 による）

注1　加納由将　＝　手足に障害があり、車いす生活を送っている詩人

4　――線④「行ける日を引き寄せる」とありますが、これはどのようなことですか。その説明としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア　突発的ではなく、計画的に物事を実行しようということ
イ　体が不自由だという運命をうけとめきれないということ
ウ　友人を誘えるタイミングをうかがい、友とでかけたいということ
エ　自分の殻を破り、未知の世界に飛び出す勇気を持とうということ
オ　過ぎ去る時間をいとおしみ、希望を実現させようということ

5　この詩の表現の特徴を説明したものとしてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア　オノマトペが多く使われ、作者の気持ちが手に取るようにわかる。
イ　自分の過去を母の視点から語ることで、客観的に描かれている。
ウ　夜の出来事のみを書くことで、逆に昼間の出来事への興味がそそられる内容である。
エ　思い出の中の風景を書き、事実の描写より心情の描写に重きを置いている。
オ　句読点を使わないことによって時間経過がぼやけ、読者を回想にひたらせる効果がある。

4　次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

①転機というのは、実に思いがけないかたちでやってくるものです。

一九八五年から一九八六年にかけてハレー彗星が現れたとき、僕も機材を車に積んで八ヶ岳に向かいました。

ピラー（支柱）を組みたて、(注1)赤道儀をのせて、望遠鏡をセットするわけですが、あとは(注2)ボルトを一本しめれば完了というときに、肝心のボルトがどこをさがしてもなかったのです。車の中を隅々までさがしても、見つかりませんでした。

「うわ、困ったな」と思っているうちに、日も暮れてきて、ふと見ると、ハレー彗星がすでに向こうの空に見えています。はりつめた気持ちがにわかにゆるみ、がっくりきました。せっかく八ヶ岳まで来て、このまま何も撮らずに帰るのも癪だなあと思いました。

とにかく普通のカメラと普通の三脚はあったので、これだけでも撮って帰ろう。

七十六年に一度の世紀の天文ショーを撮りにきたのに、小さなカメラでスナップ写真を撮るしかなかったのですから、②すっかり打ちひしがれて帰りました。

ところが現像してみたら、この写真がとてもよかったのです。

天体写真としてどうかといえば、普通のカメラで撮りましたからハレー彗星は小さいし、迫力もありません。

だけど山々と星空がいっしょに写っているせいで、すごく［　③　］がありました。

もし、ボルトを忘れることがなかったら、こういう写真は撮らなかったでしょう。いつも通り、ハレー彗星をアップした、いわゆる天体写真を撮っていたはずです。

それは天体写真というよりは、景色があって、星空がある風景写真でしたが、それを見て、僕は思いだしたのです。はるか昔、自分がそういう写真ばかり撮っていたことを。

はじめてカメラを手にした小学生のころ、まず撮ったのは夕焼けの写真でした。暮れなずむ空に浮かぶ三日月と宵の明星。この美しさをどうにかして撮りたいと思って夢中でシャッターを切ったこと。あれこそが僕の原点でした。

銀河や星雲だけをアップで撮るのなら、極端な言いかたをすれば、誰が撮影しても、同じようにしか写りません。いかにハッキリ写っているか、精度を競うだけでしょう。でも景色を入れたこの写真は、僕だけの世界です。僕はこのときはじめて自分が撮りたい世界がわかった気がしました。

ハレー彗星がちっちゃく写った一枚の写真は、自分の目ざすべき道を教えてくれたのです。

世紀の天文ショーといわれたハレー彗星で、僕は大失敗をしました。うっかりボルトを忘れたばっかりに、撮ろうと思っていた写真が撮れな

かったのですから。でもそこで全部を諦めなかったおかげで、自分が本当に撮りたい世界を見つけることができました。この本を読んでくださっている皆さんにも、ぜひ④心の片隅に覚えておいていただけたらと思います。

仮に失敗しても、そこでくじけないで。立ち上がるそのときにチャンスが隠れていることもあるのですから。

あるとき、小さなお子さんに質問されたことがあります。

「月って、いくつあるの？」

みんな、笑いましたけど、言いたいことはよくわかりました。

月には、三日月もあるし、半月も満月もあります。満ちては欠けるお月様は、その子にはとてもひとつの星とは思えなかったんでしょう。正解を教えるのは簡単ですが、⑤僕は逆にその質問に教わった気がしました。その子は、まるで初めて望遠鏡をのぞいたときに「月がどこかへいってしまった」と不思議に思った子どもの頃の僕です。

仕組みがわからないから、不思議でしょうがない。きっと大昔の人も、そんな気持ちで星空を見上げていたんじゃないか。わからないから、惹かれるのです。

知識があるから当たり前に思って疑いもしないけれど、季節ごとに同じ星座がそこにあること、星たちが、一晩のうちに空をめぐること、どれをとっても本当は不思議なことばかりです。「わかった」と思った瞬間に、消えてしまうものがある。それを忘れたくない。

星空と地上の風景をいっしょに撮った写真には、わからないから憧れる、果てがないから見つめずにいられない、僕の星空への憧れも写っていました。

その写真が僕の転機になりました。

天に星が瞬き、地上に⑥人々の暮らす灯りがある。

僕はここにいます。

少年のころから星の瞬きに話しかけてきた〈僕と星の物語〉がそこにあったのだと思います。

ハレー彗星を撮った一枚が転機になって、僕はあちこち旅をしながら撮る〈星の旅人〉になりました。

天体写真を撮るなら、どこで撮っても同じですが、星の風景を撮るなら、どこで撮るかも重要だからです。

南半球の星座を撮りたくなれば、オーストラリアへ、皆既日食が起きればブダペストや上海へ、オーロラと星空の写真を撮りたくなれば、フェアバンクスへと、あちこち足を伸ばしました。

たとえば北極圏に近いフェアバンクスは、アメリカ、アラスカ州のほぼ中心に位置するアラスカ第二の都市で、緯度は東京より約三十度も高いので、北の空の北斗七星やカシオペヤ座が東京より三十度も高く見えます。

星座を楽しんでいるときでした。アラスカから来たという男性が僕のところにやってきて、「今夜は、すごいノーザンライツが現れるよ」と言って、ポンと肩をたたいてくれました。熊のようなひげをたくわえた彼は、昼間ドライブに誘ってくれた気のいい男性です。現地ではオーロラを「ノーザンライツ」といいます。

程なくして、大きなオーロラが現れたのでビックリでした。僕はカメラを片手に撮影ポイント目がけて駆けだしたので、二、三度転び、そのたびにカメラを守るため顔から雪に突っこんでしまいました。もちろん撮影は大成功でした。海外での撮影は、⑦日本では味わえない楽しさがあります。

そんなふうに世界中を旅してきたのに、いちばん心惹かれたのは、日本のいわゆる原風景でした。

忘れかけた⑧日本の美しい言葉を思い浮かべながら、どこにでもある普通の風景と星空をひとつにして撮りたいと思うようになったのです。

撮りかたも昔は星雲や星団などをアップして撮影するために、望遠レンズを好んで使っていたのが、そのころから風景も入れられるよう(注3)広角レンズに変わりました。

オリオン座を撮っても、山が見えて小道があったりします。タイトルも「オリオン座」ではなくて「冬の小道」とか、そんなタイトルをつけたいような、〈星空の風景写真〉になりました。

そうなると以前なら明るくて天体撮影には向かないと思っていた場所が、絶好の撮影ポイントになったりもしたのです。

遠い民家の灯りのひとつひとつが、まるで星の瞬きと同じように感じられる。

それぞれの星や星座に神話や伝説があるように、ひとつひとつの地上の灯りにも物語がある。地上の風景には、そういう僕自身の思いも写りこんでいる感じがして、これこそが、林 完次の世界だと思いました。

（林 完次『十五歳の寺子屋　星の声に、耳をすませて』講談社 による）

注1　赤道儀　＝　地球の自転軸に平行に回転軸を設け、これに垂直なもう一つの回転軸を取り付けて、天体を追って観測できるようにした器械

注2　ボルト　＝　部品と部品をしめつけて固定するためのねじ

注3　広角レンズ　＝　被写体をより広い範囲で写すためのレンズ

1　――線①「転機」とありますが、どのような転機だったのですか。その説明としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア　日本のいわゆる原風景といわれる景色を撮るようになった転機

イ　何ごとも失敗してもそこで全部を諦めないで粘り強く続けるようになった転機

ウ　誰も撮れないような天体写真を撮る写真家になろうとする転機

エ　世界中を回って、めずらしい天体写真をアップで撮りたいと思う転機

オ　地上の景色をふくめて星空の風景写真を撮る写真家になる転機

2 ――線②「すっかり打ちひしがれて帰りました」とありますが、これはなぜですか。その理由としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア　七十六年に一度のハレー彗星の写真が一枚も撮れなかったから
イ　肝心なときに失敗ばかりするだめな人間だと感じたから
ウ　めったに撮れない天体写真を撮るチャンスを逃したから
エ　車の隅々まで探してもボルトが一本も見つからなかったから
オ　専門的に天体写真を撮ることには自分は向かないと思ったから

3 ［　③　］にあてはまることばとしてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア　価値観　　イ　透明感　　ウ　臨場感　　エ　無常観　　オ　圧迫感

4 ――線④「心の片隅に覚えておいていただけたら」とありますが、何を「覚えておいていただけたら」といっていますか。その内容を次の（　　）にあてはまるように四十字以内で書きなさい。

（　　）こと

（下書き用）

	32				

こと

5　――線⑤「僕は逆にその質問に教わった気がしました」とありますが、どのようなことを教わった気がしたのですか。その説明としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア　正解を教えるのは簡単だということ
イ　星空の神秘に好奇心を持ち続けること
ウ　小さいころには月がいくつもあるように見えること
エ　大昔の人や子どもは知識がないから憧れを持つこと
オ　失敗の中にチャンスがあるのだということ

6　――線⑥「人々の暮らす灯り」とありますが、これを筆者はどのように見ていますか。その説明としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア　美しい星の光とは対照的に、人間はみにくいということ
イ　星座が広く果てしないように、地球も果てしなく広いということ
ウ　冷たく光る星とは反対に、地上の人間は温かさを持っていること
エ　星座にも物語があるように、地上に生きる人にも物語があるということ
オ　不思議な星の輝きと比べて、地上の人の暮らしはつつましいということ

7　――線⑦「日本では味わえない楽しさ」とありますが、これはどのようなことですか。その説明としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア　地球上でめったに起こらないような特殊な天体の様子にめぐりあえること
イ　たまたま出会い親しくした人が、偶然撮影に向いた状況を言い当てること
ウ　星座をいっしょに楽しむ仲間がいて、仲良く撮影ができる環境にあること
エ　知らなかった現地の言葉にめぐり会い、その言葉を知ったおかげで良い写真が撮れること
オ　撮影ポイントまで雪を転げながら走っていき、写真を撮ろうとすること

8　――線⑧「日本の美しい言葉」とありますが、筆者の林完次さんは、『宙ノ名前』という作品の中で、「たそがれ」という言葉と共に、次のア～オの言葉を写真をそえて挙げています。「たそがれ」とほぼ同じ意味でつかわれる言葉を次の中から二つ選び、記号で書きなさい。

ア　入相　　イ　夕間暮　　ウ　暁　　エ　黎明　　オ　有明

5　**次の文章を読み、後の問いに答えなさい。**

私がなりわいとしている文化人類学は、「フィールド」と呼ばれる調査地に出かけてゆき、そこに長期間住みこんで、人びとの暮らしについて調査をするという学問だ。人びとの暮らしや考えていることを理解するためには、その土地の言葉ができなくてはならない。少なからぬ人類学者は、日本であらかじめ調査地の言語を勉強してから調査に出かけるのではなく、とりあえずフィールドに入り、そこで暮らしながら少しずつ言葉を学んでいく。私自身もそんな風にして、これまでタンザニアやガーナ、南インドで調査を行ってきた。【　ア　】

(注1)大学院の修士課程に在籍していた頃、同じく人類学者の卵としてモンゴル研究をしていた友人と、「①日本で思わず現地語が出てきちゃうケース」について語りあったことがあった。モンゴル語では、「ハッ」と息を吸い込むあいづちがあるらしく、彼女は日本語で会話をしている最中にも、「思わず『ハッ』ってやっちゃうことがある」という。私も同じく、舌で(注2)口蓋を「タッ」と軽く打つあいづちがひょっこり出てしまうことがあった。驚いたときの「エイ!」といった(注3)間投詞も、現地語が「思わず出ちゃう」ケースに含まれる。日本語で話しているにもかかわらず、なぜそんな表現が飛びだしてしまうのか。それは、それらが言語というよりも声、もっといえば身ぶりに近い表現であって、だからこそフィールドに滞在しているうちに、人類学者の身体に深く染みこんで離れないものになるからではないだろうか。ある土地に暮らしながら言葉を学んでいくとき、言葉は常に声であり、身ぶりであり、やりとりの中にある。それをまるごと学んでいくことは、人びとの声音や身ぶり、やりとりの作法を学ぶことだ。そのとき、「学ぶ」ことはまさに「まねる」ことであり、身体的な行為にほかならない。だから長期の調査から戻って間もなく、頭では日本にいるとわかっていても、身体はまだフィールドの感覚のままであるとき、とっさに出てくる間投詞が現地語になってしまうのだろう。【　イ　】

ところで、現在中学三年生の長女は目下、受験英語と格闘中である。文法を覚え、単語を覚え、英文和訳し、和文英訳し……と奮闘している娘をみていると、「ああ、こういうの私もやったな」と懐かしく思う一方で、自分が中学生だった頃と学習方法がほとんど変わっていないことに驚きもする。最近でこそ、読み書きだけではなく、「聴く・話す」能力も重要云々といわれているが、それでも中学校で学ぶ英語は基本的に、頭で覚えて問題を解くという机上の教科であることには変わりがないらしい。それはさっき書いたような、ある言語を話している人たちと暮らし、必死にやりとりしながら、からだ全体を使ってその言葉を「まねる・学ぶ」方法とは対照的であるようにみえる。とにかくやりとりする、という無謀で野蛮な後者の方法では、「私が理解すること」よりも「お互いが了解すること」、「頭でわかること」よりも「②腑に落ちること」の方が重要になる。そんなやりとりには、その場の状況、相手との関係性、言葉のリズムや話しだすタイミングなどのすべてが関わっている。それは言語の「学習」というよりも、相手との間に身体的・感覚的なかかわりをつくりだすことだ。【　ウ　】

ガーナの村に住んでいたころ、よく耳にするにもかかわらず、意味のわからない単語があった。ある日、近所の子どもと一緒に幹線道路の端を歩いていたら、ミニバスが私たちの横スレスレを猛スピードで追い抜かしていき、肝を冷やしたことがあった。そのとき、その子がすかさずバスに向かって拳を振り上げ「クワッシア！」と叫んだのを見て、私は悟った。クワッシア＝「バカ」だったのか。

そんな風に、ある状況の中で発せられる言葉を、声音や身ぶりや表情といっしょに全身でまねて／学んでいるうちに、だんだんと自分の思考や独り言や夢の一部が現地語のそれになってくる。それは、単に(注4)語彙が増えた、文法がわかってきた、という以上に、自分の身体感覚、ひいては身のまわりの世界や他者との関わり方が少しずつ変化していることを感じる段階だ。③ある言語が「自分のものになっていく」という感覚をもつとき、同時に私はその言語の語彙や、リズムや、やりとりが生みだしつづける独特な世界の網の目の中に少しずつ取りこまれている。

雪の多い土地で、雪を表現する語彙が豊富だというのは有名な話だけれど、私はガーナで暮らすうちに、さまざまな儀礼や霊的存在に関する語彙の豊かさを知ることになった。私自身の研究テーマがそうした土着の宗教実践だということにもよるが、英語や日本語には簡単に翻訳できない、豊かで多義的な語彙を学び、同時に儀礼や(注5)呪術の実践にふれるうちに、④私はいつのまにか呪術師や精霊たちの住む世界を、現実そのものとして受けとめている自分に気づいた。ガーナの村で、「オボソン」と呼ばれる精霊について語りあうことは、外側からそうした「お話」の世界を観察することではなくて、精霊や呪術師が躍動している現実世界に全身で参入し、その世界を生きることでもある。それは、英文和訳のように、異文化の言葉や概念が自文化の言葉や概念にスムーズに置き換えられることを前提とした言語の学習とは異なり、自分の身体感覚や世界認識そのものが揺らぎ、不安定化していくような経験だ。【 ヰ 】

人類学者のタラル・アサドは、「文化の翻訳」をテーマとした論文の中で次のように書いている。人類学者が調査地の言語を母国語に翻訳しようとするとき、彼／彼女は一組の文と文を対応させるような機械的な翻訳を行うのではない。あるいはまた、現地の人たちの語りが常に論理的にみえるように、都合のよい解釈を施しているのでもない。むしろそれは、フィールドでの生活を通して異なる言語や思考のあり方を学び、それを自国の人びとに伝えようと試みる中で、人類学者自身の言語の新たな可能性が立ち現れてくるような翻訳なのである、と。【 オ 】

言葉は何よりもまず声であり、リズムであり、やりとりであるのだから、それを学ぶには全身で他者や世界と関わり、とっくみあわなくてはならない。その過程で、私は言語を自分のものにしていくと同時に、その語彙や身ぶり、リズムが織りなす世界に取りこまれていく。私の身体はそのとき、母国語と現地語を(注6)媒介するものになる。現地語の世界に没入し、そこに生きる「私」に変身しながら、母国語でフィールドノートをつけるとき、そこには常に⑤「没入（変身すること）」と「再帰（我に帰ること）」の往復運動がある。そんな風に没入と再帰をくりか

えしていくうちに、自分自身がしだいに根底から変容してゆき、ついにはどちらが「我」で、どちらが「変身」なのかもわからなくなってくる。日本に戻って、日本人の学生としてふるまっているつもりでも、思わず口から飛びだす「ハッ」というあいづちとともに、長く暮らしたフィールドでの「私」がふいに蘇(よみがえ)ってくることがあるのだ。からだ全体を使って、身ぶりやリズム、やりとりとしての言葉を身につけることはだから、常に変わらない「この私」が異文化の言語を知り、理解し、習得する、といった一方的な(注7)プロセスではない。そうではなくて、それは変身の経験、別な世界に生きる「私」の生成であると同時に、その世界によって「私」が少しずつ知られ、のっとられていくような経験でもあるのだろう。

（石井 美保 『わたしの外国語漂流記(ひょうりゅうき) 未知なる言葉と格闘した25人の物語』河出書房新社(かわでしょぼうしんしゃ) による）

注1 大学院の修士課程 ＝ 大学を卒業後に研究する内容や期間
注2 口蓋 ＝ 口の上側の部分
注3 間投詞 ＝ 感動や応答を表す語
注4 語彙 ＝ ことばの集まり
注5 呪術 ＝ まじない
注6 媒介 ＝ 両方の間に立ってなかだちすること
注7 プロセス ＝ 手順

1 ――線①「日本で思わず現地語が出てきちゃうケース」とありますが、これはなぜ起こるのですか。その説明としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア フィールドに滞在しているうちに、人類学者の身体に言語や身振りのまねが深く染みこんでいくから
イ フィールドに滞在する前に、人類学者はあらかじめ言語や身振りを勉強してから調査に出かけるから
ウ フィールドに滞在しているうちに、現地の人がどんどん言語や身振りを教えてくれるから
エ 人類学者と呼ばれる人は、自然とフィールドの言語や身振りを身につけることができる特殊な人たちだから
オ 人類学者と呼ばれる人は、どこにいてもフィールドの言語や身振りを忘れないようにして生活しているから

2　――線②「腑に落ちる」と同じ意味を持つことばとしてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア　不安になる
イ　完敗する
ウ　満足する
エ　感動する
オ　納得できる

3　――線③「ある言語が『自分のものになっていく』」とありますが、これはどのようなことですか。その説明としてふさわしい文を次の中から**二つ**選び、記号で書きなさい。

ア　「エイ！」などの現地語の表現を、いつでもどこでも使おうとすること
イ　言語の語彙や、リズムや、やりとりが生みだしつづける独特な世界の網の目の中に取りこまれること
ウ　現地の人たちの語りが常に論理的にみえるように、都合のよい解釈を施すこと
エ　語彙や身ぶり、リズムが織りなす世界に取りこまれていくこと
オ　人類学者自身の言語の新たな可能性が立ち現れてくるようになること

4　――線④「私はいつのまにか呪術師や精霊たちの住む世界を、現実そのものとして受けとめている」とありますが、これはなぜですか。その説明としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア　ガーナで暮らすうちに、精霊がそばにいることを肌（はだ）で感じられるようになってきたから
イ　雪を表現する語彙が多い土地があるのだから、精霊を表現する語彙が多いことも納得（なっとく）できたから
ウ　儀礼や呪術が信じられている土地で、自分自身も社会の一部として生きているから
エ　フィールドでたくさんの言葉を覚えることによって、精霊の話す言葉を理解することができたから
オ　ガーナで暮らすことによって、現地の言葉や概念が自然とわかるようになり、悟りの境地にたどり着いたから

5 ――線⑤「『没入（変身すること）』と『再帰（我に帰ること）』の往復運動」をした結果、「私」はどのようになるのですか。四十字以内で説明しなさい。その際、「現地語」「母国語」の二つのことばを必ず用いること。

（下書き用）

	32			

6 この文章には、次の一文がぬけています。この文があてはまる場所を、【 ア 】～【 オ 】の中から一つ選び、記号で書きなさい。

だから、人類学のフィールドワークは楽しくもあり、ときに非常に疲（つか）れる体験でもある。

7 この文章の内容と**合っていないもの**を次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア 人類学者である筆者は、タンザニアやガーナ、南インドで調査を行う時は、フィールドに行ってから言葉を覚えていった。

イ 「ハッ」「タッ」「エイ！」などの言葉が日本でも自然に出てきてしまうのは、フィールドの感覚が抜けないからである。

ウ 中学校で学ぶ英語の学習方法は、最近では「聴く・話す」能力も重要だと言われているので、筆者の言語習得法と似ている。

エ 人類学者が調査地の言語を母国語に翻訳するということは、論理的にみえるような都合の良い解釈を施すことではない。

オ 人類学者である筆者は、没入と再帰を繰り返し、「我」と「変身」の境目のない状態になることがある。

（問題はこれで終わりです）